

# 他者を意識した客観的でよりよい伝え方を身に付けよう

～ICT機器を活用した、自己表現と他者理解の支援を通して～

北栄町立北条中学校

〒689-2111  
鳥取県東伯郡北栄町土下100-1

<http://www.torikyo.ed.jp/hojo-j/>

## 1. 研究の背景

本校は、鳥取県中部に位置し、農業を主産業とする地域を校区としていますが、保護者の多くは隣接する倉吉市内の企業等に多く勤務しています。

本校は、今年度198名、学級数は9学級あり、特別支援学級が2学級（知的障がい学級1、自閉症・情緒障がい学級1）が設置され、特別支援学級には5名の生徒が在籍しています。

特別支援学級に在籍する生徒は、これまで、自分の気持ちや考えを伝えようとするとき、自信が持てずに尻込みしたり、適切な言葉や伝え方を選ばず自分の気持ちに反して周囲と摩擦が起きたりすることもありました。要因として、相手の言動に込められた意図を正しく受け止められなかったり、自分の気持ちを伝えるために取った言動が、相手に誤解されやすかったりすることが多いように思います。

これまでは、課題が生じた時にその都度振り返りの時間を持って考えるようにしてきましたが、それを一歩進めて、様々な場面で自分たちが受け止めたり、伝えようとした内容が、適切に相手とコミュニケーションできているかどうか、ICT機器を用いながら客観的に捉えられるよう、継続的に支援できる方法を構築したいと考えました。

## 2. 研究の目的

特別支援学級在籍生徒の自己表現と他者理解の双方を充実し、他者を意識した客観的でよりよい伝え方を身に付けるため、ICT機器を活用した支援の方法を明らかにすることを目的としました。

## 3. 研究の方法

例えば、SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）において、

- ① 放送教育番組を活用して、自分が考えた反応や言動をみんなで発表しあい、振り返ることで自分のソーシャルスキルを客観的に見直し、より望ましいコミュニケーションがとれるようにする方法を考えます。
- ② SSTの課題場面を教師が演じて録画してライブラリ化し、より日常生活に近く、理解しやすい形で課題を生徒に提示します。それに対する自分の応答もタブレット端末でビデオ撮影して学級みんなで見直し、客観的に自分たちの言動を振り返ります。このような活動を継続して、表現をより適切なものにしたり、自己表現にいつそう自信を持たせたりして、仲間との良好な関係や、集団への積極的な関わりを作り出す方法を考えます。
- ③ コミュニケーションギャップは、聞き取りが不十分なために生じることが多いので、正しく相手の発言を

聞き取るための具体的な方法を考え、それを実際に行うことで、より良いコミュニケーションのあり方を考えます。自分ならどのような聞き方の工夫をするか考え、その場面をタブレット端末に録画してみんなで振り返ることにより、よりよい方法を考えます。

#### 4. 研究の内容・経過

- ① 1学期は、NHKの学校放送番組の「スマイル！」(特別支援教育・学級活動のためのソーシャルスキル、コミュニケーションスキルを支援する番組で、過去2年間分はネット上

[http://www2.nhk.or.jp/school/list/bangumi.cgi?das\\_id=D0005860000\\_00041](http://www2.nhk.or.jp/school/list/bangumi.cgi?das_id=D0005860000_00041)に動画教材としてアップされています)を支援学級で視聴し、よりよい人間関係の形成や社会的スキル・学習態度の向上につなげようと考えました。

小学校低学年を対象に作成されている番組ですが、本校の特別支援学級で視聴した際も、望ましい対応や応答の仕方について(特に中学1年生は上級生に対しても)自分の意見を自信を持って言いやすく、また、学習後もお互いの言動についてやんわりと指摘しあう場面が増えたように思います。



- ② 2学期には、SSTの課題場面を教師が実際に演じ、ビデオカメラで録画して、生活場面に近い形でのSSTビデオ教材ライブラリを作成しました。

SSTの課題は文章やカードで示されることが多いのですが、これらを映像化することにより、仕草や表情、言葉の強弱など、実際のコミュニケーションで読み取りを必要とされる情報がたくさん盛り込まれます。

それらを生徒がどのように受け止めたか聞き取り、一人ひとりが他者理解をどのように行っているか把握に努めました。

「困ったときは自分から」のテーマで作成したライブラリを活用した学習では、視聴した後、自分たちがとろうとした言動を発表するところをタブレット端末で相互に録画し、互いに見合っ、お互いの考え方やコミュニケーションの良いところを認め合う活動を行いました。

映像教材は生徒も場面の雰囲気がかみやすかったようで、「自分ならこのようにしたい」と考えをしつかり述べることができ、相互の評価もそれぞれの良い点が指摘できました。



また、この学習は平成25年10月16日に「～少人数学級を活かす学びと指導の創造事業～公開授業研究会」で公開し、校区内の小学校や近隣の中学校の先生方の参観を得、授業後には研究会を持つことができました。

いただいたご意見の中には、「それぞれの学年で起こりそうな場面（1年生は文化祭に必要な道具を職員室に借りに行くが、何を借りたらよいか分からないので困っている場面、3年生は高等学校見学に行くのに、地元の小さな駅ではなく、高等学校がたくさんある町の大きな駅でどの列車に乗ればよいか分からないで困っている場面）が課題として与えられ、生徒は自分の問題として考えやすかったのではないか。」「自分がとろうとした行動を、まず言葉にして発表し、それをタブレット端末で録画して見直すことで、自分の表現を客観的に見ることができて自分の表現の改善のめあてが持てたのではないか。」「具体的に、どのような表現がより望ましいのか、さらにみんなで考える場面があればよかった。」「『困ったときには自分から』というテーマに沿って、自分から困った状況に立ち向かっていくことで、一つずつ困難が突破できそうだという見通しが持てる内容でよかった。」などの、ご指導・ご指摘をいただくことができました。

この発表会の後、さらに、「面接」の場面で困ったときにはどうしたらよいかみんなで考え、相互に発表しあうこともできました。

- ③ 聞き取りの間違いから、誤解が生じることもあるため、「相手の発言を正しく聞き取ろう」というテーマでSSTに取り組みました。音声教材を使い、相手の意図を正しく聞き取るにはどのようにするのがよいか体験を通して学びました。

自分が聞き取った内容を発表する場面をタブレット端末で録画しあい、互いに良いところや不十分なところを確認しました。

その中で、「メモをとりながら聞くと聞き間違いが減らせる。」「分からないところがあったら、もう一度聞いたらよかった。」など、基本的なのことがらの大切さも再確認できました。

## 5. 研究の成果

今回は、5人の特別支援学級在籍生徒を主な対象として、放送番組を利用してソーシャルスキル、コミュニケーションスキルの向上を図ったり、SST課題場面を教師がロールプレイで演じてそれを基に自分の反応を客観的に見直したりしました。対象が限定されたことで、支援学級の生徒一人ひとりが、それをどのように受



け止め、自分の聞き取りや表現の改善につなげていったか継続的に観察・調査することができ、それぞれが陥りやすい傾向を把握し、必要な支援の方向性が見いだせたと思います。特に、自分の受け止め方と他の生徒の受け止め方とのズレを自分で客観的に把握でき、気をつけなければならない状況を自覚することもできたように思います。

放送番組を利用するために、番組を継続的に録画していましたが、NHKのホームページに動画ライブラリがあることが分かり、ねらいに即した番組をすぐを選択して見せることもできました。教師が演じるロールプレイは、親しみやすさがあるためか、生徒の受け止め方もより積極的で、課題となる状況が生徒にすっと入りやすいように感じました。

このような取り組みを通して、他者を意識した客観的でよりよい伝え方について継続的に考え実践する中で、「自信を持ってコミュニケーションしよう」、「自分は〇〇に気をつけよう」と自分のコミュニケーションを振り返り、改善しようとする姿勢が生まれてきたと考えます。

また、タブレット端末を利用して相互に撮影しあったことにより、情報機器の使用に対して抵抗感がなくなり、学習の場面でも使ってみるなどICT機器の活用に積極的な姿勢が生まれました。

このように、今回、特別支援学級生徒に軸足を置いて研究に取り組んだことで、一人ひとりへのまなざしを確かなものにすることができました。このことは、今後全校での実践に取り組む際に、あるいはより幅広い課題に対する実践に取り組む際に、足場をより強固なものとすることができたように思います。

## 6. 今後の課題・展望

今回、特別支援学級在籍生徒の自己表現と他者理解の双方を充実し、他者を意識した客観的でよりよい伝え方を身に付けるため、ICT機器を活用した支援の研究に取り組んできました。

今後、特別支援学級生徒のソーシャルスキル、コミュニケーションスキルをより客観的に評価する指標を考えたり、研究対象を次年度以降設置が想定される肢体不自由学級や難聴学級に広げたりするなど、さらに研究を深め、広げて行きたいと思います。

## 7. おわりに

教師が演じるSST課題場面の動画教材やNHK放送番組ライブラリの利用、さらに各自タブレット端末を利用したり、みんなで大画面テレビで確認したりと、これまで、テキストベースだけで取り組んできたSSTについて、大きくその取り組みを変えることができました。

それにより、支援学級生徒が他者を意識した客観的でよりよい伝え方を身につけることに積極的に取り組めたと思います。今回、このような研究の機会をいただけたことに感謝し、今後一層研究を深めて行きたいと思っています。